

## 英語史における繰り返しの衰退

小 川 明

0. 本稿では繰り返しという現象を歴史的な観点から検討してみたい。繰り返しというのは、ここでは同じ内容を二度以上表現するという意味で使うことにする。このような繰り返しは英語において、広く見られることである。すぐ思いつくのはいわゆる仮主語、仮目的語である。

- (1) a. *It* was lucky that you left when you did.  
b. I must leave *it* to your own judgement to decide whether you should offer your resignation.

*it* は後に続く *that* 節や不定詞の内容を先取りして表現している。ここでは具体的内容が表現される前に抽象的に *it* で内容を表わしている。次の例でも具体的内容は後に続く。

- (2) a. I saw Mary and *him* downtown yesterday, your friend from Keokuk.  
b. I noticed *his* car in the driveway last night, your friend from Keokuk.

逆に具体的内容が表現された後で抽象的に表現される場合がある。

- (3) a. My wife, somebody stole *her* handbag last night.  
b. Poor Jonesy, it had started to rain and *he* had no umbrella.

このように、英語においては、一般に代用形が主として繰り返しの役割を

果たしている。さらに例を見てみよう。

- (4) a. The population of China is larger than *that* of India.  
b. I tried to stop their quarrel, but *that* was not easy.  
c. Listen to *this*: I don't mind a joke, but *this* is going too far.  
d. Did he fail the test again? He said so.  
e. He wants to sell his car, and I want to buy *one*.  
f. She has a skin *which* burns easily.

さて (1) から (4) における代用形はすべて省略不可能である。これは英語という言葉は自由に省略できない言語であって、例えば、(1a) において *it* は主語であり、(4a) では *that* は *that of India* という NP の主要語であり、(4b) においては、*that* は主語になっているから省略できないのである。それにたいして日本語では、久野 (1978: 7) の指摘するように、「主語も、目的語も、与格目的語も、位置詞も、動詞も、文のどんな自立構成要素も、省略できる。」もし英語において日本語よりはるかに代用形を使う頻度が多いという指摘が正しいとすれば、その原因はこの省略のしにくさにあると思われる。つまり日本語では省略はるかに自由なので代用形を用いず、表現をしないで済みますのである。あるいはゼロ代用形を用いるといってもよい。

ところが、英語においても代用形が任意であるものがある。例えば、次の例を考えてみよう。

- (5) a. As food nourishes our body, so books nourishes our mind.  
b. As you treat me, so I will treat you.  
c. If you want to succeed, *then* you must try hard.  
d. And if you don't speak the language or if you can just get by in it, *then* it is a good idea to understand the business practices used in that country.

(McConnell, *Language: A Mirror of Our World*)

- e. The very solids of the land, so it seemed to Thales,  
were formed from water.

(Asimov, *Great Ideas of Science*)

- f. This, as he argued, gives a clue to the nature of mind.

ここでは代用形はあってもなくてもよい。(しかしある時と無い時では微妙な違いがみられるが、この差については Ogawa (to appear) を参照)。

1. このような任意の用法は現代英語ではそれほど多くはみられない。ところが英語を通時的に眺めてみると、違った状況が現われる。

- (6) a. She can run faster than *what* I can.

(Maugham, *The Kite*)

- b. I haven't got any more money than just what we can  
manage on. (ibid.)

- c. The unhappy man...needs no greater punishment than *what*  
he has from his own reflections. (Richardson, *Clarissa*)

- d. I hope you can walk quicker than *what* you eat.

- e. I am not near so deep as *what* you are.

(6) における *what* は明らかに代用形であって、主節の一部を指している。例えば、(6e) では *what* は *deep* の繰り返しである。標準的な現代英語においては、この種の *what* は用いられないが、古い英語においては見られ、現代でも方言によっては、使われることがある。実は (6) の *what* のように古い時代には見られ、じょじょに使われなくなり、方言にかすかに痕跡を残す代用形の用法がかなり存在するのではないかと思われる。これまでいくつかの代用形の用法を調べてきて、英語の歴史が進むにつれて、代用形が用いられることが少なくなってきたのではないかということに気づいた。

2. もう一つ同じように現代英語では用いられなくなった代用形の例を挙げてみよう。I think that he is dead.における接続詞 that はもともと指示代名詞と考えられている。この文はI think that.とhe is dead.の独立した二つの文の併置 (parataxis) から生じたとされる。もしそうだとすれば、thatは後に続く he is dead を指す代用形ということになる。これは正しいと考えられる。宮下 (1982: 115-7) は現代英語の that についても同様に考える。少し長いが引用してみよう。

that が接続詞と解釈されてゐる場合がある。例――

(1) I know that you are just. 私はあなたが正しい事を知つてゐる。

(2) That he was in error will scarcely be disputed by his warmest friends. 彼が考違ひしてゐた事は、彼に一番良い友達にとつても議論の余地がないだろう。

.....

that は実体を話手との関係に於て捉へる代名詞である。これらの例でも that は依然として代名詞なのであり、代名詞であるが故に、このやうに用ゐられうるのである。

先ず(1)から吟味しよう。‘you are just’は或る事態を分析的に捉へた表現であるが、この事態を全体としてつまり一つの統一体として捉へることも出来る。この統一体即ち実体を話手との関係に於て捉へたのが‘that’である。‘that’と‘you are just’とは同一の対象を一方は総合的に、他方は分析的に表現してゐるのである。.....(1)の文は、‘you are just’が文全体の一部である事を明確にするために、同一の事態を一旦‘that’で大括みにかつ抽象的に代名詞で表現して置いて、次に具体的かつ分析的に再表現してゐるのである。これは所謂関係代名詞が、先に具体的に表現した事(所謂先行詞で表現される)を抽象的に再把握するのと丁度逆である。

(2) では主部が複雑な事態を分析的に表現してゐるから、このままでは文全体の主述関係が聞き手や読手にとっては掴みにくい。それで先づ主部が表わす複雑な事態を一つの実態と捉へて、それを話手との関係に於て *that* で表し、次に分析的に再表現する形を取るのである。

言語過程説に立っているため、ややわかりにくい点があると思うが、伝統的な文法で言い換えれば、*that* はそれに続く文を指す代名詞であると翻訳することができる。

このように *that* を代用形と見做すとやはり (6) と同じように代用形の衰退が顕著に見られるのである。荒木・宇賀治 (1984: 540-2) によれば「*that* は ME 期にいくつかの副詞、前置詞に添加されて文を導き、やがてこれらの語が *that* なしで接続詞としても独立する契機を作り出した。*that* の補文標識としての力はそれほどまでに大きかった。さらに *that* は本来従位接続詞であった語にも余剰的に添えられた。」これらの用法は ME から ModE へ引き継がれた。EModE では次の語と *that* の結合が見られる。*after, because, before, besides, but, by, conditionally, ere, except, for, if, in, lest, now, since, unless, when, where, while.*

具体例を挙げる。

- (7) a. I hate him for he is a Christian, But more *for that* in  
low simplicity He lends out money gratis and brings down  
The rate of usance here with us in Venice.

(荒木・宇賀治 (1984: 541))

*When that* the poor have cried (松浪(1995: 119))

*syth that* (since) it muste be thus doon (done)

(小野・伊藤 (1993: 169))

And said, "*gif that* he his Baner Micht se..."

(Smith (1982: 60))

For he departed *bat* Ryuere ... *because bat* he had sworn

bat...

(ibid.)

この余剰的な *that* は ME 期に間接疑問文における疑問詞、感嘆詞、関係詞一般にも添加された。

- (8) a. Doubtless he is in great felicity and in the favour of  
god, *who that* is indewed with all these qualities.

(荒木・宇賀治 (1984: 541))

- b. The cardinal's letters...wherein was read, *How that*  
the cardinal did entreat his holiness To stay the  
judgement o' the divorce; (ibid.)

- c. Then judge, great lords, if I have done amiss; Or  
*whether that* such cowards ought to wear This ornament  
of knighthood, yea or no. (ibid.)

この *that* は時代が下るにつれて衰退する。18世紀ではかなり稀となり現代英語では *in that*, *now that* を除き廃用、古語となった。

3. Smith (1982: 88; 106; 115)によれば、*as* もやはり *that* と同様補文標識として機能した。それは方言に残っている。

- (9) a. I don't know *as* you'll like the appearance of our place.  
b. I spose I must say, *as* I'm one o' the Lord's poor  
servants.  
c. I ain't sure *as* I want to.  
d. I don't know *as* he'll come.

そして *as* もまた *that* と同じように ME において接続詞のあとに置かれた。

- (10) a. *when as* the enemy hath been ten to one (Smith (1982: 118))  
b. *while as* Astrofell did live and raine (ibid.)

もちろんこの *as* も *that* と同様衰退した。

そしてさらにこの二つの補文標識 *that* と *as* が同時に使われることがあった (cf. Smith (1982: 118))。

- (11) It seemeth to be very absurd reason that he giveth, *as that*  
the children of Abram could not be saved.

現代英語では、このように二重に補文標識が使われることはない。ここでも繰り返しが消滅していく例が見られるのである。

4. 最後に *that* 節に関してのもうひとつの衰退の例と考えられるものを挙げる。次のように *that* の前に *it* を置く古風な表現とされているものがある。

- (12) a. Depend upon it that over-education is a great error.  
b. I insist upon it that there shan't be a word about it.  
c. See to it that I have not again to complain to you about  
this matter. (大津栄一郎 『英語の感覚』)

現代英語ではこの代用形の *it* を使わなくなっている。(12a) 以外は次のようになる。

- (13) a. I insist that there shan't be word about it.  
b. See that I have not again to complain to you about this  
matter.

5. 以上二つの代用形の使用の衰退の例をあげたのであるが、調べていくとこのような衰退の例はかなりあるように思われる。以下、代用形の使用および繰り返しが衰退している例を挙げていく。

OE と ME では、関係代名詞節において代用形が二重に使われることがあった。関係代名詞が後に代名詞で再叙されるのである。

- (14) a. Wē, *þe* ūs befæsted is sēo gýming Godes folces (We, *that*  
the care of God's people is committed to *us*)  
(小野・伊藤 (1993: 49))  
b. A wyȝt *that* wrong is *his* name (a man *that* *his* [=whose])

name is wrong)

(ibid.)

- c. nis nū cwicra nān, *be ic him mōdsefan mīnne durre*  
*sweotule āsecgan* (there is now none of living men, to  
whom I should dare to speak openly my inmost heart)

(近藤・藤原 (1993: 79))

このような代名詞をもう一度関係代名詞節の中で用いる例は、現代英語でも生じるが、標準的なものではない。とくに興味を引くのは、子供が英語を習得していく過程でよく見られるということである。通時的な言語の発達と、個人が言語を獲得していく過程がパラレルな例として挙げることができるのであろうか。また近藤・藤原(1993: 79)によると、関係代名詞 *be* はまれに *be be* という具合に繰返して使われた。

そして時代が下ると、関係代名詞自体の省略がおこなわれ始めた。関係代名詞の省略は主格で14世紀後半、目的格で14世紀末から、特に詩で見られ始めるが中世の間はさほどの数ではない。ModEになってじょじょに目的格の場合の省略に限定されていく。(cf. 松浪 (1995: 67 ;118))

- (15) a. With hym ther was a Plowman, was his brother.

(松浪 (1995: 67))

- b. "Pis is *be bende of bis blame* I bere my nek; (ibid.)

6. OEでは相関接続詞の使用が盛んであった。例えば、

- (16) *ða ða he tyn wintre on ylde wæs, ða arn he to cyrcan*  
(when he ten winters in age was, then ran he to church)

松浪 (1995:30-1)によれば(16)では「従属節の *ða ða* ‘when’に呼応して主節で副詞 *ða* ‘then’が相関的に用いられ、それによって2つの節の文法的な関係が明示されている。」この構文について松浪は「相関構造は現代英語の目から見れば、やや冗漫な感じがするが、古英語では非常に多用されている。古英語の作者たちはそれによって、文のつくりをできるだけ分かりやすく表現したのであろう。その意味ではそれは、元来の並列主体の



文構造から、より複雑な文構造が発達する過程の1つの現われであるとい  
うことができよう。」と述べている。その他の相関接続詞をあげると ær...  
ær (before...before), gif... þonne (if...then), nu...nu (now that...now),  
sibban...sibban (when...then), swa...swa (as...so), þær... þær (where...  
there), þanon... þanon (whence...thence), þeah... þeah (though...yet),  
þonne... þonne (when...then) などがある (cf. 小野・中尾 (1980: 483))。  
具体例を挙げると、

- (17) a. þa com þæm Deniscum scipum þeh ær flod to, ær þa  
Cristnan mehten hira ut ascufan (then the tide came,  
however, first to the Danish ships, before the Christians  
could push off theirs) (小野・中尾 (1980: 483))
- b. Nu ic sceall geendian earmlicum deabe...nu wolde ic  
gebetan (Now that I must die a wretched death...I would  
like to make amends) (ibid.)
- c. þær ðin gold, þær is ðin heorte (where thy gold, there  
is thy heart) (ibid.)

この中で現代英語に残っているのは if...then, as...so ぐらいである。

7. さて現代英語には、次のような as の用法が存在する。

- (18) a. *The balance of power has shifted as between the enemy's  
capability and the South Vietnamese capability.*
- b. *As for myself, my adversity was a blessing in disguise.*
- c. *Coal will be decontrolled as from 31st March.*
- d. *The population of this city as of July 1st of this year.*
- e. *As to Smith, it is impossible to guess what line he will  
take.*

ところが古い英語においては、さらに時、場所を示す副詞の前にも as が  
生じた。OED (s.v. As) や Curme (1935: 78-9) の例を挙げると、

- (19) a. a province *untoucht in a manner, and new to us as till then.*  
 b. *He hasn't come as yet.*  
 c. *I expect him as next week.*  
 d. *I heard that Mr. Carlyle would be in town as today.*  
 e. *Let hym go and marry her, for as here he hath no thyng.*  
 f. *as then, as now, as three years ago, as there, as in that place*

(19)の中で、現代英語においてはas yetのみが残っている。

(18)-(19)の用法は同じである。実はasは代用形であってそれぞれイタリック体の部分を指すと考えられる。たとえば(18a)では、asはThe balance of power has shiftedを、(19b)では、He hasn't comeを指している。その証明はOgawa (1994)を参照していただきたい。とりあえずasが明らかに代用形として用いられている例があることを指摘して、(18)-(19)のasを代用形と考えることがそれほど奇想天外でないことを示しておきたい。まず文を先行詞とする関係代名詞として使われているものがある。

- (20) a. He is a foreigner, *as is evident from his accent.*  
 b. He continued to walk up and down the room with his head sunk on his chest and his brows drawn down, *as was his habit when lost in thought.*  
 c. Mary is getting married, *as I hear.*  
 d. Time is not a merciful master, *as you know.*

方言によっては、名詞を先行詞としても用いられる。

- (21) a. the man *as came yesterday.*  
 b. You know, the old gardener chap *as works here now and then.*  
 c. I can't be the only man *as walks along this street and*

wants a fag.

また代用形と見做されている *so* とパラレルな *as* についても挙げておきたい。

- (22) a. My father was Republican, and *so* am I.  
b. I saw that the face and head were wet with water, *as* were mine.
- (23) a. Bill can speak French, and *so* can his brother.  
b. He had written good poetry, *as* also had Huxley.
- (24) a. You said it was good, and *so* it is.  
b. He seemed a foreigner, *as* in fact he was.
- (25) a. They work hard.—*So* they do.  
b. He claims that the bill provides, *as* it clearly does, for all cases of unemployment.

8. 次に *what* について調べてみよう。*what* には次のような理由を示す用法がある。

- (26) a. *What* with teaching, and *what* with writing, my time is wholly taken up.
- b. *What* with the snow and my bronchitis, I haven't been out for weeks. (Declerck (1991: 462))
- c. It was impossible to have any intimate conversation with her, *what* with the char hovering away, and the children round her feet all the time. (ibid.)
- d. *What* with Carol being out of work and all, we didn't send any Christmas cards this year.

この用法は古い英語ではもっと広範囲に使われていた。前置詞は *with* に限られなかったのである。OED によれば古い英語では *for* が主として用いられていた。また Poutsma (1929: 586)によれば、*between*, *by*, *from*,

of もまた with と生じたのである。

- (27) a. What between her sudden taciturnity and Catherine's pale silence, *the girl's sense of expectancy was roused to its highest pitch.*
- b. What by threats, what by entreaties, *he finally accomplished his purpose.*
- c. What for poisons, conspiracies, and assassinations,... *there was no going there by day.*
- d. But *of all kinds of ambition*—what from the refinement of the times, from different systems of criticism, and the divisions of party—*that which pursues poetical fame is the wildest.*
- e. What of the scratching and hair-pulling I received, *I was glad to retreat.*

実はこの what も as と同様代用形であって、イタリック体の部分を指している。what の位置と (18) における as の位置がどちらも前置詞の直前であることに注意すべきである。例えば、what は (26a) では *my time is wholly taken up*, (27a) では *the girl's sense of expectancy was roused to its highest pitch* を指している。what が代用形であるという論は小川 (1995), Ogawa (to appear) を参照して頂きたい。

以上示したように、as も what もその用法は狭められてきたのである。つまり、as では (18) のように、次に前置詞がくる場合のみになり、what の場合は with がくる場合にのみに限られるようになった。

9. 次に代用形ではないが、否定の繰り返しについて考えてみよう。荒木・宇賀治 (1984: 511-2) によれば、「多重否定は OE、ME では、普通に使われ、15世紀になってもまだ少数ではなかった。EModEにはいると次第に減少しはじめる。」

- (28) a. He *ne* mihte swa ðeah on his mode afindan þæt he þone nacodan mid *nahte ne* gefrefrode (He *not* could nevertheless in his heart find that he the naked with *nothing not* comforted) (松浪 (1995: 25))
- b. He *nateshwon ne* ondred heora deofellican hiw, *ne* he næs bepæht ðurh heora leasungum. (He *not* at all *not* dreaded their devilish appearance, *nor* he *not*-was deceived by their artifices. (ibid.)
- c. As towchynges leages...they *neuer* make *none* with anye nacion. (荒木・宇賀治(1984: 511))
- d. it was in a place where I could *not* breed *no* contention with him. (ibid.: 512)

17世紀の中頃からこの型の多重否定は標準語ではほとんど用いられなくなり、非標準語に限られるようになった。非標準語ではこの型の多重否定は一貫して用い続けられている(cf. 荒木・宇賀治 (1984: 512))。

- (29) a. No, ma'am, he did *not* mention *no* particular family.
- b. I *never* said *nothing* to her.
- c. Thank God! shoo cannot stale t' sowl uh *nob'dy!* (she cannot steal the soul of *nobody*)

10. さらに主節に否定辞があっても従属節内で否定辞を繰返すことができた(cf. 小野・中尾(1980: 371), 荒木・宇賀治(1984: 512-3))。

- (30) a. ac he *ne wiðsoc* þæt he *nære* Samaritanisc (but he did not deny that he was Samaritan)
- b. I wold *not* in *no* wyse þat ye shuld *nober* sell *nor* sett to plege þat ye haue in Runnham, (I do not wish in any wise that you should either sell or set to pledge what you have in Runnham)

これは ModE においても稀に起こる(荒木・宇賀治(1984: 513))。

- (31) a. He wist *not* whether blot of foule offence Might *not* be  
purged with water *nor* with bath.  
b. Shall wee *not* thinke, that God aboue, that knowes the  
Heart, doth *not* discerne, that fraile Men, in some of  
their Contradictions, intend the same thing; and  
accepteth of both?

このタイプは現代英語では存在しないといってよいだろう。

11. 以上述べたことに類似する例として、*agiemeleasian* (deny),  
*forbeodan* (forbid), *forberan* (forbear), *forbugen* (neglect),  
*forcweþan* (refuse), *opsacan* (deny), *tweon* (doubt) のような否定の要素  
を含む動詞の目的語節に *ne* が現われることが多いことも指摘してよいで  
あろう (cf. 小野・中尾1980: 370))。

- (32) a. Se ilca Daid de *forbær* ðæt he ðone kyning *ne* yfelode  
(The same David who forbore injuring the king)  
b. God...*forbead* þæt mon *na* ðær eft *ne* timbrode (God  
forbade anyone to build there afterwards)

12. 接尾辞形式による比較級にさらに *more*, *most* を添えた二重比較は、  
ME に始まり14~16世紀を通じて、かなり頻繁であった。これは規範文法  
家の規制にかかり、18世紀から衰退した。最上級についても同様であった  
(cf. 荒木・宇賀治(1984: 476-7), 松浪(1995: 114-5))。

- (33) a. for the *more better* assurance  
b. as a walled town is *more worthier* than a village  
c. This was the *most unkindest* cut of all;  
d. And in the calmest and *most stillest* night,

13. 以上英語の歴史を眺めてみると代用形、繰り返しが減少していく例を

かなり挙げることができる。このことは何を意味するのか興味ある問題を提起すると思う。この問題に取り掛かるためには言語における繰り返しとはどういうことなのか、根本的に考える必要がある。そのためには牧野(1980)などが参考になると思われる。また子供が言語習得をしていく過程で繰り返しが多く見られることとなにか関係があるようにも思われる。これらについては、機会を捉えて調べてみたい。本稿では代用形、繰り返しが歴史的にみると衰退してきたことを指摘するにとどめる。

### 参 考 文 献

荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史 IIIA』英語学大系 第10巻.

東京:大修館.

Curme, George O. 1935. *Parts of speech, A grammar of the English language*. Vol. I. Boston: D. C. Heath and Company.

Declerck, Renaat. 1991. *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

近藤健二・藤原保明. 1993. 『古英語の初歩』英語学入門講座・第4巻.

東京:英潮社.

久野 暉. 1978. 『談話の文法』東京:大修館.

牧野成一. 1980. 『くりかえしの文法一日・英語比較対照一』東京:大修館.

松浪 有編(小川 浩・小倉美知子・児馬 修・浦田和幸・本名信行著).

1995. 『英語の歴史』テイクオフ英語学シリーズ1. 東京:大修館.

宮下眞二. 1982. 『英語文法批判』東京:日本翻訳家養成センター.

Ogawa, Akira. 1994. *As-phrases as small clauses. Synchronic and diachronic approaches to language*, ed. by Shuji Chiba et al., 439-57. Tokyo: Liber Press.

小川 明. 1995. What with...and what with...構文考察 —— whatの役割

- は何か. 『東京家政大学・英語英文学研究』創刊号. 55-68.
- Ogawa, Akira. to appear. The role of *what* in the *what with...and what with...construction*.
- 小野 捷・伊藤弘之. 1993. 『近代英語の発達』英語学入門講座・第6巻. 東京: 英潮社.
- 小野 茂・中尾俊夫. 1980. 『英語史 I』英語学大系 第8巻. 東京: 大修館.
- Poutsma, Hendrik. 1929. *A grammar of late modern English*. Part I. Groningen: P. Noordhoff.
- Smith, E. Shreeve. 1982. *Relative 'that' and 'as': A study in category change*. Doctoral dissertation, Indiana University.